

第一章 末摘花の物語 光る源氏の須磨明石離京時代

[第一段 末摘花の孤独]

*藻塩垂れつつわびたまひしころほひ(光君が須磨の浦で侘しく泣き暮らして居らした頃)、都にも(都では残された女たちが)、さまざまに思し嘆く人多かりしを(それぞれの事情で不運を嘆くものが多く在りましたが)、 *注に<源氏が須磨明石に謫去していた間の都の女性たちの動向。「藻塩垂れつつ」は「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩垂れつつわぶと答へよ」(古今集雑下、九六二、在原行平)にもとづく表現。>とある。既に何度も引かれた歌で、「わくらばに」はくまれに、偶々(古語辞典)>ということらしいが、「わくらば」はく夏、青葉の中にまじって、赤や黄色に変色した葉。>とあって、病変の痛々しさを底意に持つようで、最初から傷心の侘しさを訴えている歌なのだろう。

さても(それでも)、わが御身の抛り所あるは(御自身が公式の立場にある方は)、一方の思ひこそ(ひとかたのおもひこそ、別離ゆえに会いたさに募る一方の恋心こそ)苦しげなりしか(辛くも成るでしょうが)、二条の上なども(二条院の正夫人などにしても)、のどやかにて(穏やかなお暮らしぶり)、旅の御住みかをもおぼつかなくならず(光君の旅先の御住まい所なども御分かりに成らないという事も無く)、聞こえ通ひたまひつつ(御手紙を遣り取りなさっては)、

位を去りたまへる仮の*御よそひをも(光君が公職追放されて謹慎していらした時の一時的な無官装束などを)、*竹の子の世の憂き節を(竹の子が節を作って育つほどに長引く謹慎を憂いながら、また時には殿のお遊びの嘆き節などを添えながら)、時々につけてあつかひきこえたまふに(季節ごとに仕立てて御送りなさったりして)、慰めたまひけむ(寂しさを御癒し出来たでしょうが)、 *「御装ひ」については「須磨」巻に、春先に須磨に移って少し落ち着いた入梅時に光君は都の人々に手紙を遣り、其れに応えた二条の君の記事に<旅の御宿直物など、調じてたてまつりたまふ。かとの御直衣、指貫、さま変はりたる心地するもいみじきに(旅先での寝具類などを夫人は揃えて須磨に送りなさいます。夫が夏物の薄絹の上着と袴で衣替えした姿を思えば随分離れてから日が経った気がして)>とあった。 *注に<「今さらに何生ひ出づらむ竹の子の憂き節しげき世とは知らずや」(古今集雑下、九五七、凡河内躬恒)を踏まえる。>とある。古今集についてはミロール倶楽部の web サイトを先ず訪ねると、この歌には<物思ひける時、いとなき子を見てよめる(物思いに沈んでいた時、幼い子を見て詠んだもの)>という詞書がある、とある。「物思ひける時」とあれば、憂いがちな気分を察するが、それにしては生命力を謳歌して逆に深刻さを感じさせない歌だから、この詞書で吹っ切れ感を強調しているのかも知れない。「節(ふし)」は<突起点>であり竹に付きものだが、より一般的には<目に付く事柄>であり、「憂き節」は<嫌な事>である。また竹では「節」を「よ」とも云い、「よ」は「ふし」と「ふし」の間のこと、という。つまり「よ」は<伸び>の部分であり、<身>でもある。そして「よ」の音は「世」に掛かる。凡河内躬恒(おほしかふちのみつね)の歌は洒落ている。歌意は<何を態々成長しようとするのだろう、筍が大きくなると節だらけでごつごつした姿になるように、幼児も育てば苦労が増える世の中だというのを知らないのだろうか>で、此处では「竹の子の世の憂き」が「節を時々につけて(季節毎の折々に)」に掛かるので、文型の表意は<謹慎期間が竹の子が育つほど長く続いて残念ではありながら>ということなのだろう。ところで、「竹の子の世の憂き節」を一括りにして文字れば<生きても苦労ばかりの世の中だという愚痴話>という意も汲み取れる。しかし「愚痴話」と一般化してしまうと、須磨と明石での全ての文通に当てはまる訳で、「竹の子の節(ひょっこり出てきた悩み種)」が意味不明だ。恐らく作者は「たけのこのよ」で<光君の男根>を読者に想起させて、されば「今さらに何生ひ出づらむ」が

<何を謹慎中に勃起させているのか>という艶笑話に落ち着くから、「竹の子の世の憂き節」とはく明石の君との浮気事>ということになるのだろう。明石巻に於いて、光君が二条君に浮気を打明けて寛容を乞うた記事があったが、其処では「絵をさまざま描き集めて、思ふことどもを書きつけ」て来る光君に、二条君は寛大というより身の程を知って「ものあはれに慰む方なくおぼえたまふ折々、同じやうに絵を描き集めたまひつつ、やがて我が御ありさま、日記のやうに書き給へり」と語られていた。その遣り取りも含めて二条君は「慰めたまいけむ」なのだ、と解したい。表意だけの意図なら、作者は何もわざわざ凡河内躬恒の歌を引くことは無い筈だ。そして、その作者の意図は続く「時々につけて(季節に応じて)」に、洒落言葉として掛かっているのだろう。

なかなか(正式には)、その数と人にも知られず(世間から夫人とは認められず)、立ち別れたまひしほどの御ありさまをも(光君が離京なさった時の御様子なども)、よそのことに思ひやりたまふ人びとの(人伝てに聞いて想像なさる女たちで)、下の心くだきたまふたぐひ多かり(内心で不安を覚えなさるような類いの方々が多く在りました)。

常陸宮の君は、父親王の亡せ給ひにし名残に、また(うせたまひにしなごりにまた、お亡くなりになった遺産管財に於いては別に)思ひあつかふ人もなき御身にて(保護者など居ない貧乏な御身の上で)、いみじう心細げなりしを(惨めで不安がちのところに)、思ひかけぬ御ことの出で来て(思いがけない光君の御通いが始まって)、訪らひきこえたまふこと絶えざりしを(援助品の御見舞いが絶えなかったものを)、厳しき御勢にこそ(いかめしきおんいきほいにこそ、光君にしても絶大な権勢を誇っていてこそ)、ことにもあらず(大した事でもない)、はかなきほどの御情けばかりと思したりしかど(わずかな施しばかりと御思いだったが)、待ち受けたまふ袂の狭きに、大空の星の光を盥の水に映したる心地して過ぐしたまひしほどに、かかる世の騒ぎ出で来て(この失脚の騒動となって)、なべての世憂く思し乱れしまぎれに(光君はすっかり厭世気分で思い悩んでいらっしゃる内に)、わざと深からぬ方の心ざしはうち忘れたるやうにて(特に深い思いでもない相手への贈り物は面倒臭くなって)、遠くおはしましにしのち(都を遠く御離れに成った後は)、ふりはへてしも(沈む気分を振り払ってまで敢えて)え尋ねきこえたまはず(御手紙を差し上げる事も一切為されませんでした)。

その名残に、しばしは(光君の施しの残り物が有る暫くの間は)、泣く泣くも過ぐしたまひしを(泣きながらでも其れなりに御暮らし為されたが)、年経るままに(としつきふるままに、年を追うほど)、あはれにさびしき御ありさまなり(何とも貧しい宮姫のお暮らしぶりでした)。古き女ばらなどは(宮邸の古女房たちなどは)、

「いでや(いやもう)、いと口惜しき御宿世なりけり(何と残念な御縁でしょうか)。おぼえず神仏の現はれたまへらむやうなりし御心ばへに(思わず神仏が現れ給うた様な殿の御通いに)、かかるよすがも人は出でおはするものなりけりと(このように頼りになる人も世の中には御出でになるものなのだ)、ありがたう見たてまつりしを(有難く拝し奉りしを)、おほかたの世の事といひながら(よく有る事とは言いながら)、また頼む方なき御ありさまこそ、悲しけれ(他に頼る方のない姫の御身の上なれば御可哀想な事です)」

と、つぶやき嘆く。さる方に*在り付きたりし(そのような援助無しのまま長年暮らしていた)あなたの年ごろは(かつての年月は)、いふかひなきさびしさに目なれて過ぐしたまふを(口にも

したくない貧乏暮らしに姫も慣れてお過ごしなさっていたが)、なかなかすこし世づきてならひにける年月に(反って少しの間でも世間並みに暮らした事が)、いと堪へがたく思ひ嘆くべし(余計辛くお成りなのでしょう)。*「在り付く(ありつく)」は近世では<頼れるものを得る>という意味が主流で、「さる方」が前文を受けて<他に頼る方のない姫の御身の上>となることから紛らわしいが、此処の「ありつく」は<住み付く=長年住む>(古語辞典)の意味との事。

すこしも、さてありぬべき人びとは(少しでも宮邸に縁の在った使用人は)、おのづから参りつきてありしを(光君の御通いで台所事情が良くなると、自然に屋敷に寄り付いていたが)、皆次々に従ひて行き散りぬ(御通いが途絶えて援助が無くなり遣り繰りに窮するに従って皆次々に離散していきました)。女ばらの命堪へぬもありて(女房たちの中には命尽きた者も居て)、月日に従ひては(日を追うに従って)、上下(かみしも、家司や女房などから下男下女まで)人数(ひとかず)少なくなりゆく(少なくなっていく)。

[第二段 常陸宮邸の窮乏]

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の棲みかになりて、うとましよう(うっそうとした)、気遠き木立に(けどほきこだちに、不気味な庭の木立に)、梟(ふくろふ)の声を朝夕に耳ならしつ、人気にこそ(ひとけにこそ、まだ使用人たちが多く居て人の気配が在る内なら)、さやうのものもせかれて影隠しけれ(そうした獣たちも落ち着かないので姿を隠していたが)、木霊など、けしからぬものども(こだまなどの奇怪なものどもが)、所得て(ところえて、使用人が減つ隙間に我が物顔で居場所を得て)、やうやう形を現はし(次第に現れるようになって)、ものわびしきことのみ数知らぬに(何とも心細い事ばかり増えて来るので)、まれまれ残りてさぶらふ人は(僅かに居残って仕えていた女房は)、

「なほ(何ともこの不気味さは)、いとわりなし(全く手に負えません)。この受領どもの(近頃は受領などの地方官が蓄財をして)、おもしろき家造り好むが(凝った家造りを好む者が中には居るもので)、この宮の木立を心につけて(当家の庭の木立を気に入って)、放ちたまはせてむやと(屋敷を売却なさらぬものかと)、ほとりにつきて(下端者を通じて)、案内し申さするを(下話を申し入れて来ていますので)、さやうにせさせたまひて(姫様も其の様にご売却あそばして)、いとかう(もうこんな)、もの恐ろしからぬ御住まひに(薄気味悪くはない御内に)、思し移ろはなむ(住み替えを御考え為さっては、如何かと存じます)。立ちとまりさぶらふ人も(去らずに残っている女房たちも)、いと堪へがたし(とても弱っています)」など聞こゆれど(などと申し上げたが)、

「あな、いみじや(おお厭だ)。人の聞き思はむこともあり(他人の耳目に如何思われるかという世間体も有る)。生ける世に(私の代に)、しか名残なきわざ(そのような先祖の足跡を無にするような事が)、いかがせむ(どうして出来るものか)。かく恐ろしげに荒れ果てぬれど(かくも薄気味悪く荒れ果てたとはいえ)、親の御影とまりたる心地する古き住みか(ふるきすみか、馴染み深い住居)と思ふに(と思えば)、慰みてこそあれ(心安らいでいるものなのです)」と、うち泣きつつ(姫は涙を隠さず)、思しもかけず(手放す事など思いも寄らなさらぬ)。*此処の文は常陸宮の君が初めて纏まった言葉で内情吐露したもので、大輔の命婦との対比で地文としては既に語られては居たが、誇り高い格式にしか自己の優位性を認識できない没落貴族の悲哀を自らに課している姫の姿が改めて窺がえる。その外

形こそが自分の存在する意味と言う立場でありながら、姫の容姿が不細工だったというオチが末摘花巻の筋立てで、強烈で残酷なまでの古い価値観への皮肉が、それを自分の鏡として見ざるを得ない光君のコンプレックスとして描かれた味わい深さだった。それにしても此処で此処まで言い切る姫の、命婦から〈内気一方〉と聞かされていた所為か、反論を展開して〈意思表明〉する姿自体に奇妙な気丈さを感じて少し意外。

御調度どもを(おんてうどどもを、手持ちの諸道具を)、いと古代になれたるが(とても古代風なところが)、昔やうにてうるはしきを(由緒深く価値がありそうだと)、なまもののゆゑ知らむと思へる人(生かじりで知った風に言うと思える人が)、さるもの要じて(さるものえうじて、そうした名品を必要とした)、わざとその人(発注者がわざわざ)かの人にせさせたまへると(名工に作らせ為さった逸品と)尋ね聞きて(何処からか聞きつけて)、案内するも(買取を申し込むにも)、おのづから(どうしても)かかる貧しきあたりと思ひあなづりて言ひ来るを(かかる貧しい台所事情の足元を見て値踏みしてくるのを)、例の女ばら(また女房たちは)、

「いかがはせむ(とて止む方なし、仕方がありません)。そこそは世の常のこと(窮すれば質草で金を用立てるのは、当たり前です)」とて、取り紛らはしつつ(なるべく足元を見られないように体裁を取り繕いながら、話を進めて)、目に近き今日明日の見苦しさを繕はむとする時もあるを(名品を愛でる豊かさよりも、目先の暮らしの豊かさを求めようとする時も有るのを)、いみじう諫めたまひて(姫はきつく御叱り為さって)、

「見よと思ひたまひてこそ(私に名品の価値を知れと父宮が御思いに成ったからこそ)、しおかせたまひけめ(これらの品々を名工たちに、作らせ為さったというのに)。などてか(どうして)、軽々しき人の家の飾りとはなさむ(成りあがり者の家の飾りなどに出来ようか)。亡き人の御本意違はむが(亡き父宮の御遺志に背く事に成るのが)、あはれなること(悲しすぎます)」とのたまひて(と仰って)、さるわざはせさせたまはず(売却をお許しになりません)。

[第三段 常陸宮邸の荒廢]

はかなきことにても(ちょっとした用件ですら)、見訪らひきこゆる人はなき御身なり(立ち寄り申す人の無い姫の人付き合いの無さでした)。ただ、*御兄の禪師の君ばかりぞ(おんせうとのぜんじのきみばかりぞ)、まれにも京に出でたまふ時は、さしのぞきたまへど(様子を見に御出でに為るが)、それも、世になき古めき人にて(まず他には見ない昔話のような人で)、同じき法師といふなかにも、たづきなく(生活力が無く)、この世を離れたる聖にもものしたまひて(浮世離れした修行僧然として)、しげき草(庭に生い茂った草や)、蓬をだに(よもぎをだに、腰高にまで伸び放題のヨモギですら)、かき払はむものとも思ひ寄りたまはず(刈り払ってきれいにしようとも思い付き為さらない)。 *注に〈末摘花の兄君。後の「初音」巻に「醍醐の阿闍梨の君」と呼称される。今、「まれにも京に出でたまふ時は」とあるのも、山科の醍醐寺あたりを想定してよい。〉とある。

かかるままに(そうする内に)、浅茅は庭の面も見えず(あさぢはにはのおもみみえず、丈の低いチガヤが地面を覆い隠し)、しげき蓬は軒を争ひて生ひのぼる(伸び放題のヨモギは軒に届くほど育っている)。葎は西東の御門を閉ぢこめたるぞ頼もしけれど(蔓を這わせるカナムグラがにしひんがしのみかどを開かないほど生い茂っているのは用心が良いように見えるが)、崩れがちな

るめぐりの垣を(崩れかかった外周の生垣を)馬、牛などの踏みならしたる道にて(馬や牛が踏み均して道との境を無くしてしまい)、春夏になれば、放ち飼ふ*総角の心さへぞ(敷地内で馬牛を放し飼いする牧童の遠慮の無さたるや)、めざましき(呆れ果てる)。 *「総角(揚巻あげまき)」は<少年の髪を左右に分け耳の上で丸く束ね結った髪型>と古語辞典にあり、また<その髪型の少年>ともある。

八月(葉月はづき、陰暦八月なれば今の九月頃)、野分荒かりし年(のわきあらかりしとし、大きな台風が有った年に)、廊どもも倒れ伏し(対屋や中門への渡り廊下が崩れ落ち)、*下の屋どもの(下働きの者の建物などの)、はかなき板葺なりしなどは(粗末な板屋根だったものは)、骨のみわづかに残りて(骨組みだけになって)、立ちとまる下衆だになし(居残る下人の一人も居ない)。煙絶えて(けぶりたえて、炊事の煙も立たなくなつて)、あはれにいみじきこと多かり(何とも惨めな事ばかりでした)。 *「下の屋(しものや)」は<寝殿造りで、主殿の北側にある召使いなどの下人が住む建物。また、雑物を置く建物。>と大辞泉に有る。実に凄まじい荒廃ぶり。

盗人などいふ(ぬすびとなどという)*ひたぶる心ある者も(勝手し放題の者も)、思ひやりの寂しければにや(見るからに空き家だったのか)、この宮をば不要のものに*踏み過ぎて(この宮邸を押し入る価値が無いと値踏みして通り過ぎて)、寄り来ざりければ(狼藉に及ばなかったので)、かくいみじき*野良、藪なれども(このように凄まじく荒れた外観ながらも)、さすがに寝殿のうちばかりは、ありし御しつらひ変らず(昔の仕切り飾りのままで)、つややかに掻き掃きなどする人もなし(きれいに掃除する使用人も居ない。)。塵は積もれど、*紛ることなきうるはしき御住まひにて(紛れもないゴリッパな御住まいにて)、明かし暮らしたまふ(姫は御暮らしをなさる)。*「ひたぶる」は<一つの方向に強く片寄るさま>と古語辞典にあり、「一向」の漢字が当てられ<一途に、無性に、ひたすら>と言い換えられるとある。また、「ひたぶるころも」も<容赦の無い心、無情残忍な心>とある。此処でも然のまま<残忍な心>と言い換えても良さそうだが、より文の意味に沿うなら他人を省みない事の説明修辞のようなので<勝手し放題>とした。 *「踏み」は<値踏み>と<歩く>の重複意。 *「野良藪(のらやぶ)」で<荒れた庭>と古語辞典にある。敷地垣根が済し崩されているのは、「庭」はそのまま<外観>である。校注で「野良」と「藪」を分けてあるのは意味不明。 *この皮肉の言い方は、今でも丸々使う。

[第四段 末摘花の気紛らし]

はかなき(ちょっとした)古歌(ふるうたや)、物語などやうの(作り話などのような)すさびごとにてこそ(慰み物によってこそ)、つれづれをも紛らはし(張りの無さも紛れて)、かかる住まひをも思ひ慰むるわざなめれ(こうした惨めな暮らしでも耐えていけるものだろうに)、さやうのことにも心遅くものしたまふ(そうしたものにも姫は興味を御向けにならない)。

わざと好ましからねど(特に好ましい相手ではなくても)、おのづから(普通に)また急ぐことなきほどは(また急用でもない時は)、*同じ心なる文通はし(おなじころなるふみかよはし、共通の話題になる季節柄の御機嫌伺いの手紙の遣り取り)などうちしてこそ(などを為合える事で)、若き人は木草につけても心を慰めたまふべけれど(若い人なら木や草の変化に気持ちも新しく元気づきそうなものを)、 *「同じ心なる文通はし」の逐語は<同じ話題の文通>だろうが、こういう対象のはっきりしない言い回しは、その当時では語り手と聞き手の間では対象がはっきりと伝わっていた筈なので、今の言い換えとしては対象まで言わないと訳にならない。と思うので、続く文との整合性から<季節柄の御機嫌伺い>と対

象を既定して補記した。此処の文はこの箇所だけでなく全体に対象が省かれているので、何度か読み返して意味を把握した。こういう文は、ただ分かり難いだけなので、イヤになる難文だ。

親のもてかしづきたまひし(姫は親が殊更大事に御育てになった)*御心掟のままに(みこころおきてのままに、御方針のままに)、世の中をつつましきものに思して(世間を用心すべきものに御思いに成って)、まれにも言通ひたまふべき御あたりをも(たまには御連絡なさるべき御親戚にでさえ)、さらに馴れたまはず(全く親しく為さらず)、 *「心掟」は<かねて思い定めておいた事>と古語辞典にある。

古りにたる御厨子開けて(ふりにたるみづしあけて、古くなった置き戸棚をあけて)、『*唐守(からもり)』、『*藐姑射の刀自(はこやのとじ)』、『かぐや姫の物語』の絵に描きたるをぞ、時々のみさぐりものにしたまふ(時々取り出して御覧に成っている)。 *「唐守」は注に<散逸した物語。内容未詳。『宇津保物語』「国譲上」「倭上下」に見える。>とある。<見える>というのは、内容未詳ながら「唐守」という題名の物語があった事が『宇津保物語』に記されている、ということだろうか。内容未詳とは如何にも消化不良だが、分からないものは分からない。 *「藐姑射の刀自」は注に<散逸した物語。内容未詳。平安時代から鎌倉時代初期までの物語作品中の和歌を集めた『風葉和歌集』(文永八年撰進)に見える。>とある。

古歌とても(ふるうたととも、昔の歌を味わうといっても)、*をかしきやうに選り出で(自分の作意の参照となるように選り出して)、題をも(作題事情や発句経緯に)読人をも(よみびとをも、作者名までも)あらはし(明らかにして)心得たるこそ見所もありけれ(歌の背景を知ってこそ詠み手の気持ちも分かるだろうに)、うるはしき(何ともゴリッパな麗々しい)*紙屋紙、*陸奥紙などの(かんやがみ、みちのくにがみなどの)ふくだめるに(ふやけだってしまったものに)、古言どもの目馴れたるなどは(定番の有り触れたものが書き留められているのは)、いとすさまじげなるを(ひどく興奮めに見えるが)、せめて眺めたまふ折々は(よほど昔の栄華に縋りたい物思いの時などには)、ひき広げたまふ(そうした巻物を姫は広げて御覧に成ります)。 *「をかしきやうに」は逐語で<おもしろくなるように>としたのでは、「をかしきやうに選り出でたればをかし」という無意味な文になってしまう。そこで文意に沿って補記したが、これまた此処の箇所だけでなく全体に於いて、此処の文は地というよりは作者の歌人としての歌の鑑賞法の展開とでも言うべきものらしく、私なりに作者の意を汲んで言い換えた、つもり。 *「紙屋紙」は鎌倉時代以降は古紙再生の生産が盛んだったらしいが、Yahoo!百科に<紙屋院(かみやいん)で漉(す)き出された和紙。もとは図書寮紙屋院(ずしりょうしおくいん)で漉かれた紙を示し、728年(神亀5)の『正倉院文書』に初出するが、平安時代の嵯峨(さが)天皇の大同(だいてう)年間(806~810)に京都の野宮(ののみや)の東方へ紙屋院が拡充設立されてからは、そこで漉かれる上質な紙の一般名となった。中国から輸入された唐紙(からかみ)をしのぐ優秀な、麗しい、ふくよかな紙として、上流貴族の間でもてはやされた。>とあり、当時の最上紙だったらしい。 *「陸奥紙」はYahoo!百科に<その紙質が都の紙屋紙(かんやがみ)に匹敵するほど良質なため、平安京の貴族の間でもてはやされて、やがて紙屋院を衰退に導く結果ともなった。王朝文学にしばしばその賛美のことばとともに用いぶりが表れており、厚くてふくよかな、しかも白くて清らかなその麗しい紙は、懐紙として詩歌を書いたりするのに愛用されたことがわかる。>とある。当時の最上紙だったらしい。また、檀紙(だんし)のことともされ、今の檀紙が縮緬状の皺を特徴とするようだが、これは厚紙が湿気でふやけて波打つことを逆手にとった後世の製紙技法のようで、当時の新品は紙屋紙以上の光沢紙と考えて良いかもしれない。父宮御存命中の其等紙屋紙陸奥紙の新品が正に経年変化で<ふやけて波立ってしまった>というのが、此処の文の描写なのだろう。

今の世の人のすめる(今の多くの人がするような)、経うち読み(読経や)、行なひなどいふことは(仏壇参りなどの勤業は)、いと恥づかしくしたまひて(仰々しいと人目を気になさって)、見たてまつる人もなけれど(誰も拝見しようという人などは居なかったが)、数珠など取り寄せたまはず(数珠などの法具を御揃えにはなりません)。かやうにうるはしくぞものしたまひける(これほどまでにゴリッパな姫の昔気質ぶりでした)。

[第五段 乳母子の侍従と叔母]

*侍従などいひし御乳母子のみこそ、年ごろ*あくがれ果てぬ者にてさぶらひつれど(長年と宮家の自室を住まいにしていた者で今でも姫に仕えていた女房だが)、通ひ参りし齋院亡せたまひなどして(お勤め申した齋院がお亡くなりになり収入がなくなったりして)、いと堪へがたく心細きに(ひどく困窮して先行きが不安だったところに)、 *「侍従」は光君十八歳の中秋八月二十余日に、迂闊にも宮姫の強姦に及んだ切っ掛けの一つとなった姫の代返をした若女房で、その年の冬十月末あたりに再訪が始まった時には掛け持ちで齋院に出仕していて宮家に居なかったことが記されていた。それで宮家には気が利くものが居なかったという話で、侍従の姫宮との幼馴染らしい親密ぶりや、幾らか軽率ながらも利発そうな人となり語られていた。ただ、この本文を語る今現在が光君帰京後、さらに六条御息所亡き後の光君二十九歳冬とすれば、11年前の事であり、如何にも過ぎし青春の日々に感慨を覚える。 *「あくがれはつ」は<離れ切る=去り果てる>という言葉だろうが、今の宮家の窮状では実質無給だろうから、使用人としての立場より幼馴染の友人として曹司で暮らしていた、という意味かと思う。

この姫君の母北の方のはらから(姫の母宮の実姉妹で)、世に*おちぶれて(皇族から下級貴族の身分に下って)受領の北の方になりたまへるありけり(受領の奥方に成られた方があって)。 *「おちぶれる」は<以前の身分や財産を失い、みじめなありさまになる。>と大辞林にあるが、平安期の受領の台頭は著しく荘園自治から武家社会へと変容する中で、正にこの姫君の惨めさとの対比で語られるように、実質では財産は殖えて豊かに暮らしたのであり、下がったのは名目上の身分だけだった。作者はこの世情の身分社会の危うさを言いたくて、わざと「おちぶれて」と皮肉った。

娘どもかしづきて(その娘たちを御世話する女房として)、よろしき若人どもも(他の目ぼしい宮家の若女房たちと共に)、「むげに(全く)知らぬ所よりは、親どももまうで通ひしを(自分たちの親も出入りしていた所だから)」と思ひて、時々行き通ふ(小遣い稼ぎにその受領邸に時々出向いていました)。

この姫君は、かく人疎き御癖なれば(とにかく人付き合いをしない御性格なので)、むつましくも言ひ通ひたまはず(その叔母上とも親しくお手紙も交わしなさない)。

「おのれをばおとしめたまひて(姉上は私を軽蔑なさって)、*面伏せに思したりしかば(不名誉に御思いだったので)、姫君の御ありさまの心苦しげなるも(姫君の御様子が御困りのようでも)、え訪らひきこえず(御見舞い申し上げません)」など、なま憎げなる言葉ども言ひ*聞かせつつ(などと厭味の一つも侍従に言いながら)、時々*聞こえけり(時々姫に申し上げる御手紙を届けさせました)。 *「面伏せ(おもてぶせ、おもふせ)」は<不名誉、恥>と古語辞典にある。「思したりし」と過去形なので故人の修辭。 *使用人の侍従に対する「聞かせつつ」と、実力は有るものの受領家の身分である叔母が姪である

宮家の姫に「聞こえけり」と敬語表現となる、身分社会に基くその言葉遣いは今にその時代の空気を伝えるようで妙味がある。つまり叔母上の怒りまでも漂わし、時代の動きさえ感じさせる語り口、かと思う。

もとよりありつきたるさやうの並々の人は(生まれついでての地方官のような下級貴族の身分の人は)、なかなかよき人の真似に心をつくろひ(努めて上級貴族を真似ることに気を使って)、*思ひ上がるも多かるを(卑しさを律する者が多かったが)、やむごとなき筋ながらも(高貴な血筋ながらも)、かうまで落つべき宿世ありければにや(こうも身分を落とす宿命にあった事から見ても)、心すこしなほなほしき御叔母にぞありける(心が少し品の良くない叔母上だったのです)。*「思ひ上がる」は<古典では「つけあがる」「いい気になる」という意味合いではなく、誇りを高くもって、低俗なものを排するさまを表す。>と古語辞典にある。まさに受領の台頭で実権を失った鎌倉期以降の上流貴族の「思ひ上がり」こそが、<つけあがり>といったところなのだろう。

「わがかく劣りのさまにて(私がこのように劣った身分だからと)、あなづらはしく思はれたりしを(侮りやすく思われていたのを、見返したいので)、いかで(何とかして)、かかる世の末に(このような光君の不遇で援助を失った宮家の末期に)、この君を、わが娘どもの*使ひ人になしてしがな(姫宮をわが娘たちの使用人に見立ててみたいものだ)。*「使人」は「つかひびと」とローマ字表記されている。「つかへびと」なら「仕へ人」となり<仕える人=女房>と言い換えるべきかとも思えるが、それでも余り感心しない。それは何も女房は侍るものとかいう言葉尻りからではなく、宮姫が受領家の女房を勤めるなどという事は、当時の身分社会上には有り得ないからである。当時の常識からすれば、実力のある受領にして宮家と縁続きとなる立場なら、本来は進んで援助して宮家の威光によってより広い知己を求めるべき、なのだろう。どこに幸運が在るか知れないと思えば、幾らかの援助は無駄は承知の投資であり、其れが出来する自らの状況をこそ喜ぶべき筈だ。それに、この姫宮は良い珠なのである。御所中枢に近い光君と繋がりがあるのだから、大いに幸運を期待できる。確かにこの時期は不遇による御見限りで姫と光君とは縁遠くなっていたかもしれないが、無駄を承知ならそういう時こそ最も少ない投資で効果が期待できる好機とも言えそうだ。ともあれ、叔母上の考え方はそうではなかったようだが、かといって最上位の使用人たる女房でさえ、姫宮には有り得ないのでより下位の<召使い>は論外だろう。ただし名目上では、である。実質でなら、帝が下人の後を歩く事だって有り得る。となれば、やはり此処の「つかひびと」は「使ひ人」であり<使用人>ではあるのだろうが、それは具体的な職名としての<使用人>なのでは無く、実質で<使用人>に「做してしがな=見立てたい」という意味だろう。実際の処遇としては、姫を形式的に客扱いして生活の面倒は見るものの、縁結びはさせずに飼い殺して、日頃は<娘たちの相手をさせる>ことで<女房まがい>の暮らしをさせる、ということだろうから、その意味で「つかひびとになす」を言い換えれば<用を足す役回りに就かせる>となる、かと思う。

心ばせなどの古びたる方こそあれ(姫の考え方の古めかしい向きこそが)、いと後ろ安き後見ならむ(うしろやすきうしろみならむ、安心な世話係となるだろう)」と思ひて、

「時々ここに渡らせたまひて(時々は当家に御越し下さい)。御琴の音も(姫君の御琴の音を)うけたまはらまほしがる人なむはべる(御聞き申し上げたがる娘も居ります)」と聞こえけり(と申し上げました)。

この侍従も(叔母上はこの侍従にも)、常に言ひもよほせど(常に姫のお出掛けを催促したが)、人にいどむ心にはあらで(姫は叔母への反感からでは無く)、ただ言痛き(こちたき、至って)御も

のつつみなれば(人前に出ない御性格から)、さもむつびたまはぬを(そうした親しいお付き合いを為さらないのを)、ねたしとなむ思ひける(実に不快に思っていました)。

かかるほどに(そうこうする内に)、かの家主人(かのいえあるじ、その叔母の夫が)、*大弐になりぬ(大宰府筆頭次官に任命されました)。 *「大弐(だいに)」は<律令制で、大宰府の次官(すけ)のうち、最上位のもの。権帥(ごんのそち)を欠くときに実務を執った。>と大辞泉にある。大宰府(だざいふ)は今では福岡県中西部に太宰府の地名を残しているが、古代令制下に筑前国筑紫郡に置かれた大宰府は全権代の総督府であり、その長官たる大宰帥(だざいのそち)は軍総指揮の元帥であった。というのは、当時の主たる外国が朝鮮半島および中国であり、この島国の軍事を含む外交交渉のほぼ全てを担っていたのが大宰府だったからである。平安期に於いては然程の軍事緊張が無いまま組織の形骸化が進んだらしいが、軍を率いる「府」の独自性は他の役所とは異なる存在感を有していたのだろう。「大弐」の呼称に別格の重さがある。

娘どもあるべきさまに見置きて(娘たちにそれぞれ結婚相手を決めて京に残し置いて)、下りなむとす(叔母夫妻は大宰府へ下向しようという際に、)。この君を、なほも誘はむの心深くて(姫宮を誘って伴おうという叔母の執念は深くて)、

「はるかに(遙か遠い筑紫へ)、かくまかりなむとするに(こうして赴任しようとするにつけても)、心細き御ありさまの(姫君の心細い御様子が)、常にしも訪らひきこえねど(今までも常には御見舞い申し上げていませんでしたが)、近き頼みはべりつるほどこそあれ(近くにいる事を頼りに何か有ればすぐ行けると存じて居ましたが)、いとあはれにうしろめたくなむ(離れてしまうと大変気掛かりで心配です)」など、*言よがるを(巧く言い包めようとするが)、さらに受け引きたまはねば(姫は全く応じなさらなかったので)、 *「言よし(ことよし)」は<口先が巧い、言葉巧みである>と古語辞典にある。「がる」は<形態・意志の形容動詞>で<~のようにする、~しようとする>。

「あな、憎(マ、可愛い気のない)。*ことことしや(勿体ぶって)。心一つに(自分ひとりの思いで)*思し上がるとも(尊厳を自負していても)、さる*藪原に年経たまふ人を(あんな荒れ屋に何年も暮らす人を)、*大将殿も、*やむごとなくしも(とても見捨てられないとも)思ひきこえたまはじ(御思い申しなさるまい)」など、*怨じ*うけひけり(叔母上は姫を恨んでその不幸あらん事を祈ったのです)。 *「ことことし(事事し)」は<仰々しい、物々しい、大袈裟だ>と古語辞典にあり、勿体をつけた腰の重さを感じさせる。 *先に「思ひ上がる」について<古典では「つけあがる」の意味は無い>とノートしたが、此処のように否定文中の条件として挙げられれば「つけあが」っているという非難の意は拭えない。<「つけあがる」の意味は無い>というより<「つけあがる」の意味が無い場合もある>と言った所だろうか。 *「藪原(やぶはら)」は<雑草や竹が伸び放題の手入れが無い土地>で<荒れ屋>を言う悪口なのだろう。 *「大将殿(だいしょうどの)」は光君。この話は光君流浪期の事柄で、実際には流浪当時は無位無官なのだが謹慎直前の官職名を通称で使っていた、という事ようだ。正確さよりも全体の人となりを示す分には便利な尊称なので、今でも良く見られる呼称法ではある。 *此処の「やむごとなく」は<「やむごとなききは(これ以上ない最上位の身分)」の者として=王家の者として>の意味では無い。もしそうなら「しも思ひきこえたまはじ(必ずしも思い申し為さるまい)」の文意が成立しない。なぜなら宮姫は王族であって、それは光君が如何思うかに関らず客観的に既定された身分だからである。此処の「やむごとなく」は、そうした持って廻った言い回しではなく、その文字の通りの直接的な意味に違いない。即ち<止む事無く=通いを止める事無く=見捨てる事無く>である。実は、これは意外に核心を突いた言い種なのかもしれない。というのも、光君は本来なら王族の女を見限る事は出来ないからである。なぜなら、そうした身分を踏

みにじる行為はそれなりの権威筋から糾弾されかねず、下手すれば地位を失う事になるからである。ところが謹慎流浪中の光君は今現在既に地位を失っている。これ以上失うものがあるとすれば、後は命だけである。そして光君は再生して復権したが、生まれ変わった以上は以前の契約は一度全て無効になったのであって、再契約をしないままにただで結果として<王族を見捨ててしまえる>、という神業が果たせる特別な立場にいたのである。この<過去の清算>が「再生」の大きな一面である事をこの叔母上の怨み節は指摘している。さすがに此処までの理屈立ては少し穿ち過ぎか、との嫌いは我ながら感じるが、この作者の理屈っぽさを思えば、やはりその意図は必ずあるに違いない。 *「ゑんず」は<怨む、恨む>。 *「うけひ(名詞)」は<吉凶占い>で、「うけふ(動詞)」はその吉または凶となる事を<祈る、呪う>とある。